

リニューアルを振り返って — 反省と今後の展望 —

動画も
ご覧ください。
vimeo.com/475692566



〈司会〉**斉藤 隆三** 元・東邦大学医学部 客員教授, 本誌編集委員長
向井 秀樹 東邦大学医学部 客員教授, 本誌編集委員
浅井 俊弥 浅井皮膚科クリニック 院長, 本誌編集委員
山本 俊幸 福島県立医科大学皮膚科学講座 教授, 本誌編集委員
馬場 直子 神奈川県立こども医療センター皮膚科 部長, 本誌編集委員

A4判になり読みやすくなった

斉藤 昨年は新型コロナウイルス感染症で、日本だけでなく世界中が振り回された1年でした。そうした中、この『皮膚病診療』もリニューアルしてちょうど1年が経過しました。そこでこの1年を振り返るとともに、本誌の今後の展望などについてお話しただきたいと思います。たとえば、雑誌のサイズがA4判と大きくなり、表紙も変わりました。そこでまず、全体的な印象についてうかがいたと思います。向井先生からお願いします。

向井 サイズがB5判からA4判になったことで非常に読みやすくなり、カラー写真もとてもきれいになった印象があります。また新しいコーナーも設けられ、わかりやすい雑誌になったと思います。

浅井 私も、読みやすくなったことが一番大きな変化だと思います。ビジュアル的にもとてもよくなったなと感じています。

馬場 写真や画像、活字も大きくなりましたし、帯の体裁や挿絵などもカラフルでちょっとお洒落な雑誌になったと思います。

山本 雑誌のサイズが大きくなったことに伴い、臨床写真や病理組織の写真も大きくなり、とてもみやすくなりました。以前から

「『皮膚病診療』は写真が命」といわれており、臨床写真が不明瞭な場合は、執筆者に差し替えをお願いすることもよくありました。もちろん、よい写真があれば最初からそれを利用するはずですから、差し替えができないこともあります。臨床写真は撮り直しがきかないので、症例等を執筆される先生方にはよい写真を撮っていただくようお願いしたいと思います。

斉藤 そうですね。写真も大きく掲載できるようになりましたので、ぜひよい写真を送っていただきたいと思います。

「編集後記」に代わり「Editor's eye」を新設

斉藤 それでは、各論的な話に入りたいと思います。この雑誌は毎号特集テーマを設けていますので、そのテーマの選び方が常に課題になります。特集テーマの選び方についてご意見があればお願いします。

向井 以前は編集委員長によって決められていましたが、現在は委員長を含む5人の編集委員がおのこの案をもち寄り、編集会議で一年分のテーマを決めています。それにより、これまでにない斬新かつ画期的なテーマも取り上げられるようになりました。ただ、人気のあるテーマに偏ってしまい、本当は重要でも地味なテーマだと外れてしまうこともあるので、そうしたことへの配慮も必要かもしれません。

斉藤 『皮膚病診療』は一般臨床家向けの皮膚に関する内容を中心とした雑誌ということになっていますので、できるだけcommon diseaseも取り上げるべきだと思います。ただ、それだけだと新しい疾患、新しい知見を取り上げる機会が少なくなるので、内容全体のバランスを考えながらテーマを決めることが重要にな



斉藤 隆三 編集委員長



図1 特集のポイントを紹介するEditor's eye (p.11)

ります。雑誌の構成として、冒頭に「Editor's eye」を新設しましたが、浅井先生、その点について何かご意見はありますか。

浅井 各号の担当編集委員が掲載予定論文をすべて読んだうえで、今号の内容のポイント「Editor's eye」で取り上げれば、読者が要点を押さえやすくな

ると思います。たとえば、いまどのような疾患でどのようなことが話題になっているのかをそこで紹介できれば、読者の助けになると思います。そうした使命感をもって「Editor's eye」を書いていきたいと思っています。

斉藤 「Editor's eye」を書くためにはすべての掲載予定論文を読まなければなりません。それはたいへんな作業です。馬場先生はどのような手順で書かれていますか。

馬場 どういう意図でこの特集号を企画したのかをまず書きます。さらにすべての論文を読んだうえで、自分がどういう感想をもったか、どういうことを学んだかを書き、読者にはどういうところに注目し、とくに深く読んでいただきたいポイントをしっかりとお伝えするように努めています。

斉藤 山本先生はいかがですか。

山本 「Editor's eye」が設けられたことで、期せずして責任編集みたいな形になりました。つまり誰が今回の責任者で、どういう意図で特集が企画されたのかが読者にわかるようになったことはよかったと思います。私はこの1年、自分が担当のときには、特集用に掲載されたすべての論文について一言でもコメントを書くようにしてきましたが、今後は取り上げる症例をいくつかに絞り、それらについて少し詳しくコメントを書くようにしようかと考えているところです。

先ほど話が出たcommon diseaseは特集を組むのがけっこうむずかしく、ありふれた疾患はちょっと変わった点がないと学会報告されませんので、症例をピックアップするのに苦労します。2020年4月号で私が担当したときには、紛らわしい疾患を対比する形で

提示し、その違いを強調するようにしました。学会報告から一方の症例はピックアップして、それと対比する症例を探すのはむずかしいので、結果的にうちの教室(福島県立医科大学)からの症例が多くなってしまいました。また、必ずしもcommonな疾患ではなくなりました。

この号は、アドバイザーの先生方のアンケートで好評だったようですが、次回また同じような企画ができるかは自信がありません。

斉藤 「Editor's eye」を新設した代わりに「編集後記」がなくなりました。その点についてはどうでしょう。

向井 「編集後記」では特集テーマについても触れていましたが、掲載論文の半分ぐらいいしか読まずに書いていました。しかし「Editor's eye」では論文をすべて読んだうえで、面白いと思ったものについて書くようにしています。たとえば10月号の「新時代を迎えたアトピー性皮膚炎」でも、読んで欲しいと思った論文を取り上げました。その際、結果を示さず、この論文ではこんな検討がされているといった書き方をしました。そうすることで、読者に読んでみよう、結果を知りたいという気持ちになっていただけるのではないかなと思ったのです。また特集のタイトルも、以前は単に「接触皮膚炎」といったテーマの疾患名のみになっていますが、いまは「日常に潜む接触皮膚炎」など、取り上げる疾患の前後にキャッチーな言葉を付け加えるようにしました。それによって、より読者の興味を引けるタイトルになったように思います。

斉藤 読者の中には「編集後記」が好きな人もおられました。中には「編集後記」から先に読むという人もおられ、それがなくなったのは寂しいとの声も聞かれます。しかし「編集後記」をなくし、「Editor's eye」を新設したことは一つの試みですので、しばらくはこのままでいきたいと思っています。

ワークライフバランスも新たな課題

斉藤 「Editor's eye」以外にも、新しい企画を複数



向井 秀樹 編集委員



浅井 敏弥 編集委員

立ち上げました。馬場先生が企画した「私のワークライフバランス」もその一つですが、馬場先生、企画の背景などについてお話しいただけますか。

馬場 皮膚科は女性医師の割合が高い領域で、しかも年々その傾向が強くなっていると思います。その一方で、

女性医師は結婚、出産、育児、伴侶の転勤、親の介護といった個人的な理由で常勤を続けられなくなるケースが少なくないのも現状です。そうした方たちのほとんどは、仕事と家庭を両立させていくためのよい知恵や方法はないものかと悩んでおられます。そこで、先輩医師が自分の経験を踏まえてアドバイスをしたり、エールを送ったりすることができればと考え、「私のワークライフバランス」を企画しました。女性医師には全国にいろいろなネットワークがあるので、そのつながりを広げたい、強化したいという思いもあり、リレー形式で書いていただいています。当初から反響はとても良好なのですが、ただワークライフバランスは男性にとっても大事なテーマですから、男性医師にも仕事、家庭、趣味などを含めたものを書いていただくことにしました。withコロナの時代となり、出かけることが少なくなる反面、余暇は増えているのではないのでしょうか。そうした時間を有効に使っていただくためにも、この企画がお役に立てればと期待しています。

日常診療に役立つ情報を幅広く提供

斉藤 臨床に役立ついろいろな情報を取り上げる「日常診療に役立つ豆知識」も新設されました。これは向井先生の企画ですね。

向井 近年は皮膚科学も着実に進歩し、新しい治療、新しい薬が次々に開発されています。しかし、それに関する情報をなかなか得られない、ノウハウがわからないということもしばしばあります。その一方で、原著論文を読む時間がない先生方も多いと思いますので、論文のポイントやノウハウを短くまとめれば、先生方の助けになるのではないかと考えて企画しました。

いまのところ原稿はすべて依頼していますが、今後は投稿していただけるようになることを期待しています。

斉藤 教科書には書かれていないような治療法や考え方にも言及していただきたいですね。向井先生は、「案件から学ぶ医療事故の対策と問題点」とのタイトルで、医療事故の問題も取り上げられておられます。それについても少しお話しいただけますか。

向井 私は日本医師会の医師賠償責任保険調査委員会の委員も務めていますが、最近では皮膚科領域で医療事故に関する事案が増えており、100万円以上の賠償金が発生するケースも数多くあります。そのため、皮膚科領域全体にそうした情報をもう少し伝える必要があると考え、企画しました。「こういうことに注意していれば、こうはならなかったのに」といったことをお伝えすることで、注意喚起にもなると考えています。最近、日本皮膚科学会学術大会において、医療安全に関するシンポジウムや専門医講習会が行われています。本誌でもその対策の重要性を発信するために、この企画を今後も続けていきたいと思っています。

斉藤 事故をおこさないようにする対策ですね。事例に対してどう考え、どういう対処をしたかということも、詳しく発信していただきたいと思います。山本先生は、一昨年から「私の視点」を担当されています。それについてお話しいただけますか。

山本 「私の視点」は、臨床医が日常診療で感じていることを1~2枚の写真とともに自由につづってもらうものです。次の筆者を指名するリレー式ですので、依頼された先生は、書きたいことを急に思いつくか少し不安なところもありましたが、いまのところ順調に続いています。やはり皆さん、普段からいろいろ考えながら診療をされていることの表れだと思います。

斉藤 ちょっとした臨床のヒントも書かれているので、とても面白いですね。ぜひ続けていただきたいと思います。浅井先生の「皮膚科のトリビア」も長い連載となっており、たいへん好評です。

浅井 この企画は、学会などで得た新鮮な情報を紹介するような形で書いてきました。ただ現在は、新型コロナウイルスの影響で学会はもちろん、地域の講演会などもほとんどがWeb講演になり、直接参加できなくなりました。学会や講演会で地域に出かけていって仲間と会うことや、講演のあとの懇親会も楽しみでした。それが学会に行くモチベーションに



図2 声

もなっていましたし、そこで得た情報が「トリビア」につながっていたのですが、今後Web講演ばかりになると、「トリビア」のネタ探しに苦労しそうで少し心配です。

斉藤 情報収集はたいへんでしょうが、浅井先生にはぜひ「皮膚科のトリビア」を続けて

いただきたいと思います。「声」の欄はいかがでしょうか。

山本 「声」の欄はぜひ充実させたいと思っています。掲載症例に対するご意見がたまに寄せられ、最近少し増えていますが、内容によっては匿名でもけっこうですので率直な疑問や感想をどんどんお送りいただけたらうれしいです。また、アドバイザーの先生方が一新しましたので、こちらから依頼がなくても、掲載症例に対するご意見をぜひお寄せいただきたいと思います。それから、「Editorial」に書いた内容に対してのご意見・ご批判なども歓迎しますし、取り上げてほしいテーマとか、こういうコーナーがあればいいといったご意見・ご要望も寄せていただきたいと思いますね。

馬場 そうですね。遠慮されているのか、あまりそうした声は寄せられていません。また、疑問点に関する意見が寄せられた場合は、それをそのまま掲載して終わりではなく、その領域に詳しい先生にお願いして回答も必ず載せるような工夫も必要だと思います。

この雑誌を皆さんで育てて欲しい

斉藤 本誌をリニューアルして1年が経過し、アドバイザーの先生方からも多くの意見を頂戴しています。本誌は皮膚疾患を中心とした症例報告あるいは学術的な情報の提供が主たる目的の学術雑誌ですが、「私のワークライフバランス」や「日常診療に役立つ豆知識」などの新たな企画も加わり、より幅の広い情報源としての雑誌に変わりつつあります。将来を見据えた雑誌のあり方について、ご意見ををお願いします。

向井 内容については毎年再考するのではなく、2～3年見据えてからアドバイザーを含めて皆さんの意見をうかがい、改善していくという流れをつくる

とよいと思います。

浅井 今後の方向性としては、デジタル化も考える必要があります。この新春放談は動画での配信も企画しました。動画による医療情報の提供も、新しい商業誌の形として必要なのではないかという気はしています。ぜひご覧いただき、感想を寄せていただきたいと思います。

斉藤 国もデジタル庁をつくるそうですから、そうした試みも必要かもしれませんね。

馬場 新しいことを取り入れることはもちろん必要ですが、『皮膚病診療』は日常臨床に直結して役立つ情報が数多く盛り込まれていることが本来の特長だと思います。そこは見失わないようにして、皮膚科医としての技を磨くのに役立つというところを忘れないで続けていけることを願っています。

山本 雑誌の種類も増えているので、同じ先生が同じようなテーマで、いろいろな雑誌に書かれているのが現状です。そこで、他誌ではあまり取り上げられていない論文が『皮膚病診療』には載っていると思っただけのような雑誌を目指していくことも、一つの方向性ではないかと思います。

斉藤 withコロナの時代になり、雑誌がどうあるべきかをあらためて考えなければならなくなっています。読者の先生方には「声」の欄などを通してどんどんご意見やご指導をいただきながら、皮膚科領域の専門誌としての道を歩んでいきたいと思っています。この雑誌を皆さんに育てていただくことをお願いして、新春放談を終わりたいと思います。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



山本 俊幸 編集委員



馬場 直子 編集委員